

『その時殺しの手が動く―引き寄せた災、必然の9事件』  
『殺ったのはおまえだ―修羅となりし者たち、宿命の9事件』  
『殺人者はそこにいる―逃げ切れない狂気、非情の13事件』

『新潮45』編集部編

新潮文庫／2002～2003年／各476円＋税

# ケアな一冊

## 孤独という地獄

自己中心的な……あまりに自己中心的な……

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

まがまが  
禍々しい題名の本が並んでしまった。実は今回も前回に引き続き文芸書を選んでみた。小川洋子の読売文学賞受賞作、『博士の愛した数式』である。交通事故の後遺症で「記憶が80分しかもたない」天才数学者と、そこに派遣された家政婦、そしてその息子の物語。2年後に還暦を控えた私は最近とみに涙もろくなっており、心温まる話に弱い。また、ほろりとしてしまったと繰り返すのもあまりに芸がないと、迷っているうちに会ったのがこの3冊の本であった。

相手も自分も愛し大切に、関係を育てていく人々の物語と異なり、ここで語られるのは、他者を、あるいは自分を、あるいはまた世界を信じることができなくなってしまった孤独な人々の物語だ。収められているのは、そのほとんどが、読めば「ああ、確かにそんな事件があった」と思い出すことができるものである。最近の事件とは限らない。

すでに死刑が執行された人もいれば、現在服役中の人もいる。未成年者が引き起こした事件もあり、未解決の事件もいくつか含まれる。親を殺害した子ども、子どもを虐待の果てに死なせてしまった母親、夫を殺した妻、妻を殺害した夫、嫁を階段から突き落とした姑、姉の首を絞めた妹、兄の胸に包丁を突き刺した弟、行きずりの殺人、強盗殺人、無理心中。著者らは事件の背景に迫ろうとして、事件の周辺を取材する。その結果、浮かび上がってくるのは、あまりにも身勝手に自己中心的な殺人の動機である。

「私の頭の中は、恨みを晴らす計画でいっぱいでした。このころ、私は大学ノートに自分なりに殺す相手、順序などを記入して計画を立て

たのです。ノートに書き込んだ相手は三十人以上」。昭和60年7月、熊本県で起きた強盗殺人事件の犯人(M)の供述である。このころというのは、仕事に就かず酒びたりの日々を過ごしていたMに離婚を申し出た妻とその母親をナイフで突き刺し、母親が出血多量で亡くなった第1の事件で、無期懲役に服役中のときのことである。

そして第2の事件は第1の事件から14年後、仮出獄後1年半の後に起こった。自由がなく1日が長くて辛い苦しい刑務所生活を送っていた考えたのは、自分をこのような目に合わせた妻の一族への復讐だけであったという。最も殺したかったのは元の妻。しかし、計画は思う通りには進まず、なかば自棄になっていたMがたまたま入り込めたのが、第2の事件の被害者、妻の母親の弟の妻とその養女の家だったのである。

Mは2歳のときに父親を喧嘩で亡くしている。母親もまもなく家を出て、Mと兄は叔父夫婦に育てられた。叔父夫婦には子どもがなく、たいそう可愛がられて育ったという。しかし、兄は「まっすぐに育った」が、Mは高校を中退後「刑務所とシャバを行ったり来たりする生活に堕ちていった」。逮捕後「何も反省はしていないし、反省するぐらいならこんな事件は起こしません」と言い切るMに同情の余地はない。

しかし、他者への恨みだけで生きる、そんな孤独な人生を生き続けたMは1匹の蜘蛛も助けたことはなかったのだろうか。地獄に降りてくる蜘蛛の糸はなかったのだろうか。そんなことも思った。

さかた・みよし 2か月に一度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピーンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……。でも、一度手にした本は、最後まで読みます。